

座談会 .. 絶望の淵で語れよ、希望！

山田昌弘（東京学芸大学教育学部 教授）

玄田有史（東京大学社会科学研究所 助教授）

玄田 .. 山田さんは、二〇〇四年に『希望格差社会』（筑摩書房）という書籍を出されています。その内容について、簡単にご説明いただけますか。

山田 .. 私は家族社会学者として、パラサイトシングルなど、親子・夫婦関係や恋愛関係などを中心に今まで研究をしてきました。その中で、パラサイトシングルには、大勢のフリーターが含まれていることがわかってきたのです。そこで今度はフリーターを研究对象として、インタビュー調査を始めました。直接会って話をしてみると、私がイメージしていた印象とはかなり違っていましたね。

玄田 .. どう違っていたのですか？

山田 .. 一言で言えば「自分が今やっていることと、将来の夢にズレが生じている」ということでしょうか。そこに違和感というか、疑問を持ちました。

玄田 .. 具体的にはどういうことなのでしょう？

山田 .. 「専門職に就きたい」、「自分はこういう仕事に就きたい」と、自分の夢や希望を語ってくれます。しかし「その夢や希望を実現するために、具体的にどういうことをしていますか」と聞くと、ほとんど返事が返ってこない。今、現実に行っている仕事を聞くと、「コンビニの店員」と答えたりする。別にコンビニの仕事が悪いわけではありません。ただ、現実に行っている仕事と将来やりたいことの間には大きなギャップがある。断絶しているんです。

玄田 .. 僕は、希望にもいろいろな種類があると思っています。実現可能な希望もあれば、そうでないものもある。山田さんは、フリーターたちの「行動を伴わない希望」がとても目に付いたということなんですね。

山田 .. そうですね。作家の村上龍さんが『希望の国のエクソダス』（文芸春秋／二〇〇〇年七月）という書籍の中で、こういうニュアンスのことをおっしゃっています。「今の日本社会には何でもあるけど、希望だけがない。それなのに、何もなくて希望だけがあつた時代と同じ教育を受けているというのはおかしい」と。私も、社会制度と希望、社

会情勢と希望の間には、何かしら関連性があると思います。

『ソーシャルリサーチ』という雑誌で、「HOPE」の特集をしていたんですね。そこでネットという社会心理学者がこんなことを話しています。「希望は、努力が報われるときに生じる感情状態である。努力をしてもしなくても結果は同じだと感じたときに、そこにデイスパー（Despair＝絶望）が生じる」。

確かに一九九〇年代は、努力が報われる時代であり、そういう環境があつた。しかし一九九〇年代以降、希望を喚起させなくするような社会環境が、どんどん形成されてきたのではないかと。

私は今までに、百人以上のフリーターに会っています。今の日本の状況、特に若者やフリーターの置かれている状況を見ますと、「今自分がやっている仕事では何も報われない。だからその報われなさを補償するために、夢をみざるをえない」。そんな風に感じます。

今の時代は、昔に比べれば非常に自由です。ホリエモンのように若手で夢を叶える人もたくさん出てきている。それも事実です。しかし、全員がホリエモンになれるわけではないんです。そこに、格差があるのではないかと考えたんです。

玄田： 書籍タイトルの「希望格差」という言葉は、非常にショッキングでした。でも、「格差」と表現したことで、希望を持つことがいいことで持たないことは悪い、と周囲に受け取られたりしませんか。そういう解釈をされたとすれば、山田さんとしては、どうお感じになりますか。

山田： 新しい言葉を作った以上、責任を持たなきゃいけないとは思っています。でも、なかなか難しいですね。パラサイトシングルのとぎも、「親と同居している未婚者Ⅱパラサイト」とは、一言も書いていないのですよ。それでも、親と同居していることのは非だけが、クローズアップされてしまう。

今も状況は同じなのかもしれません。希望を持たないことが悪い、とはどこにも書いていない（苦笑）。希望を持っていないような環境に置かれていてではないか、と表現しているだけなんです。今やっていること、例えば仕事・家事・趣味など何でもいいのですが、それがいつか報われると思つてやっている方が、人間はイキイキとした生活が送れますよね。しかしながら「希望」というものは、「持とう」と思つたからといって、持てるようになるわけじゃないと思うのです。

玄田： 確かに、希望を「持たない人」と「持てない人」は僕も違うと思います。僕は「希望学宣言」を考える中で、希望を持ちましょう、希望を持たないのはけしからんとい

うような話はしたくないと思いました。しかし、希望を持ちたくても持てない社会だとしたら、それでいいのだろうかという疑問はあるわけです。一方で「希望をあえて持たない」という生き方もあると思うんですね。

『ショーシャンクの空の下』（※注1）というアメリカ映画があります。無実の罪で刑務所に入った主人公に対して、仲間が言うわけです。「ここで大切なのは、希望を持たないことだ」と。選択がまったく出来ない状況で希望を持つことは死につながる、不幸につながるみたいなことを言うわけです。確かに刑務所のように監視された環境の下で生きるとき、希望を持つことは自分自身を不安にさせるでしょうね。希望をもたないということを意識的・無意識的にしている社会・環境は絶対にあると思います。

山田： 私には、希望を持たないことによつて、そういう状況に適応しているという風に見えますね。しかし、そういう状況を作り出す社会を果たして「いい社会」と言えるのか。そちらの方が気になります。

玄田： 「希望を持って」「希望を持って」と言われ続ける社会も、また問題ではないかと僕は思います。

山田： 「希望を持って」と言ったからといって、そう簡単に希望を持てるものじゃない。それが、私の考えの大前提なんです。自分には希望があるから、それでいい」というものでもないと思います。

そもそも、希望が満ち溢れている時代には、わざわざ「希望のある・なし」なんて問題になりません。環境問題や少子化問題がいい例でしょう。いい環境があるのが当たり前、子どもが生まれてくるのが当たり前前の社会には、そういう問題があるとは意識すらされなかつたわけです。

まずは、今の日本社会に焦点を当ててみる。その上で、希望を促進するような状況、もしくは阻害するような状況があるのかということ、みなさんに認識してもらいたい。それが『希望格差社会』という書籍を書いた私の目的なのです。

玄田： 希望学の中で「希望」を考えるとき、まさに社会との関わりを、最も重視していると思っています。その第一歩として、希望と社会の関係との関わりについて、調査を始めたわけなのです。調査結果を聞いていただいて、いかがでしたか。

山田： 希望と仕事には、深い相関関係がありそうだという結果が出ていましたよね。しかしながら、〴〵こういうモノが希望です」と、希望を、具体的なモノや仕事に置き換えることは難しいでしょうね。希望は常に、その過程の中にあると思います。そういう

意味では、挫折経験がある人の方がやりがいを持ちやすいという結果には、私も納得ですね。

玄田 ..

最近では希望学というよりも、挫折学を研究しているような気持ちになります。希望を持ちましょう、こうすれば希望が持てますという言葉には、正直、僕自身も嫌悪感があります。

希望をつきつめればつきつめるほど、それが大きな絶望に終わりがちです。有名な魯迅の「絶望が虚妄であるように、希望もまた虚妄である」なども同じでしょう。カミュの「希望というのは、諦めに等しいもの。人生を生きる上で必要なのは、諦めないうことだ」など、「希望」と「絶望」はセットで用いられることが多い。絶望を伴うからこそ「希望」である、と。ですから、希望をどう修正するかというプロセスを明らかにして、その上で社会全体を考える方がいいような気もしています。

山田 ..

でも私は、挫折と絶望は違うと思います。絶望は、「努力が全部無駄になった」というような感情だと思えます。しかし、挫折というか失敗したとしても、自分が今までやったことが無駄にならないと思える。そう思えたならば、挫折しても次の希望を持てるだと思えますよ。

玄田 ..

ドイツのブロツホは、「希望というのは、絶えず新しいことの繰り返しだ」と表現しています。ニュアンスが何となくわかるような気がします。

フリーターやニートなど、やりたいことが見つからない、という若者が多数存在しているという現実があります。たとえ希望を持ったとしても、自分の実力では無理だとわかってしまい、だから何もしたくないという人も少なからずいる。それをどう修正するのが大切だと思います。

こんな話を聞いたことがあります。プロ野球選手になることだけを夢見て、ずっと努力してきた人がいた。当然、中学・高校と野球部に入り、ただひたすら野球の練習だけをしてきた。小さい頃から、野球のことしか考えてこなかったんですね。でも、ある時と気付くわけです。自分の実力では無理だ、自分にはプロ野球選手になれる力がない、と。夢を失ったその人は、今後自分は一体何をしたらいいのか、自分の進むべき道がわからなくなってしまった。

でもある時、ふと誰かが「なぜ野球選手になろうと思ったのか」と、その人に聞きました。「初めて野球場に連れて行ってもらったとき、その芝生の美しさに感動したんです。うわーっ、すごいって。ここで野球ができれば最高だと思ったのがきっかけです」と。で、それを聞いてその人は「じゃあ、芝生に関わる仕事をするのはどうか」

と彼に話したんです。野球選手は無理でも、芝生に関わる仕事はできるのではないかと。本人も、なるほどと思って、そこから職探しができるようになったのです。

笑い話に聞こえるかもしれませんが、でも実は、こういうことがとても大切だと僕は思っています。小さいときの自分の希望に、他人がふつと関わることで、はじめて見えてくるものもあるのではないのでしょうか。

本人は「野球選手になりたい、なりたくない」とばかり思っていますから、簡単に軌道修正することができません。しかし、自分と全く関係ない人から、一見まったく関係ない小さい頃の自分の希望を聞かれて、しかも相手は自分の希望を否定しないで受け入れてくれる。その上で「芝生の仕事はどうか」と言ってもらえると、そこから軌道修正がいろいろ可能なんです。

社会との関わりを考えると、その「社会」がどういうものかも、実際にはよくわからない。しかし前提として「他人がどうその人に関わっているのか」は大切なんです。それを事例などから明らかにしていけないと、希望を持ってよ、挫折するながらんばれといつても、前に進めない。

山田..

そうですね。私も、玄田さんの言う「つながり」という表現がとても好きです。つながりを通じた転職は成功するけれども、「もうヤダ」と思って辞めた転職は成功しないと、玄田さんは分析なさってますよね。「つながり」は大切です。

私は、希望⇨努力が報われると定義しましたがけれども、実は、「自分は報われた」という気持ちだけでは、多分「希望」は生じないんですよ。希望にならないと思うんです。今や将来を見ていて、周りの誰かに、自分の努力を評価してもらえるかどうか、大きなポイントだと思います。

その人の周りにどういう人がいるか。その人をきちんと見て、ちゃんと評価してくれるような人がいるかいないか。昔は簡単に、結婚して働いて家を買えば、みんなが「いい人生だ」と言ってくれたわけです。今はその部分が、すでに多様化しています。

玄田..

「周りの誰か」は、具体的には誰かというのも問題があります。ひとつは家族なんでしょう。調査の結果をみると、希望を持っている人は、家族から「期待」されていた経験がある。おもしろいと思ったのは、「家族が豊かでしたか」「親から愛情を注がれましたか」という質問と、希望の有無にはあまり相関関係がみられない点ですね。少なくとも今の初期調査においては、これは何かのヒントです。

よく「期待をかけすぎると子どもがダメになる」などと言いますが、「期待」・「愛情」

「豊かさ」の間には、つながりはあるものの、微妙に違いがある。「期待」というものと「希望」との関係は、家庭だけでなく職場や学校も含めて、「つながり」ということを考える上で大事な問題だと思います。

山田： アメリカの親子の場合、ミドルクラスの親は、「グッドジョブ！」など、子どもがちゃんとやってきた努力に対して必ず褒めようとしていますね。たとえ失敗したとしても褒めようとする。日本と違って、そういう習慣があるんですよ。

玄田： 希望学の立ち上げに関して、周囲から否定的に受け取られることもありましたが。例えば、最近アメリカでも「希望」のテーマが話題になっています。特に誰が一番その言葉を使っているかという点、ブッシュ大統領だというんです。演説の中でよくそういう言葉が出てくる。アメリカという国はもともと「希望」がそんなに全面に出てくる国じゃない。だから「希望」「希望」ともてはやされること自体に、一種の「危うさ」を感じなきゃいけないと指摘されました。

なるほど、と思いましたね。僕は、「風通しのいい」希望を語りたいと思っています。そのために、いろいろな人の話や、いろいろシーンにこぼれ落ちていく「希望」についての言葉などを、きちんと拾って理解していききたい。共通言語を作りたいと思います。

山田： 確かに、わざわざ「HOPE」という言葉を使わなければいけないところに、アメリカの行き詰まりを感じますね。例えば、アメリカ第三十五代大統領ケネディの時代は「ニューフロンティア」、第三十六代大統領ジョンソンの時代は「偉大な社会」(Great Society)。自らが開拓作業をして開拓者になる、制度によって自分の努力が報われ、希望がどんどん叶えられていった時代は、逆に言えば「HOPE」という言葉が必要なかった。今まではずっと、「希望」が叶えられてきた時代だったわけですよ。

一体いつから「希望を持って」と、わざわざ言わなくてはならなくなったのでしょうか。

玄田： 先日、スタッズ・ターケルの『希望——行動する人々』(文芸春秋)という本が出版されました。原著のタイトルは「HOPE Dies Last」(希望は最後に死ぬ)。本の内容は、教師やミュージシャンなど、有名無名を問わず、希望を失わず逆境を乗り越えた、アメリカに生きる人々へのインタビューなんです。こんな風に我々も、ちゃんと言葉をつむいでいくということが大切なのではないでしょうか。

アメリカほどではなくとも、日本でも頻繁に「希望」という言葉が出てきています。

これに「希望」もあるかといえば、やっぱり同時に危うさも感じますよね。二十一世紀の日本はある種の「希望」ブームです。なぜ今、希望についてこんなにもたくさん語られなければならないのか。この点をきちんと記録したいという思いも、「希望学」の目的の一つなんです。

山田・・ どういう場所に、どういう意味で「希望」が語られているか。それを分析することもありますね。

玄田・・ 僕がまず意識しているのは、生命の現場です。「希望学」を立ち上げてから、皆さんからメールをいただく機会が増えました。その中に、重い心臓病で、明日生きられるかどうかともわからない。生死に関わる病と闘っている、そんな子どもが抱えている「希望」の問題も希望学に入りますか、という問いあわせもありました。もちろん対象になりませんし、そこから我々が学ぶことは非常に多いと思います。生き長らえるのがむずかしい状況でも、なにかがしかの希望を持つことによって、残された人生に影響を与える。それはおそらく、医学や看護学で今までも研究されてきたことでしょう。

しかし、そういう生命を扱う現場だけではなく、スポーツでも、教育でも、「希望」は大きく影響しているはず。まずはそこから学ばなくてはいけないのではないかと、考えています。

山田・・ 教育現場でも、特に深刻な問題になっていますよね。

玄田・・ 荻谷剛彦さん（東京大学教授・教育社会学）は、教育現場での希望という言葉が好まじくないようです。教育の世界では、「希望が持てる社会」「希望の教育」など、希望という言葉があふれています。しかし、希望の意味づけ、社会との関係性などがきちんと語られているわけではない。安易に希望という言葉を使う傾向にあり、希望さえあればそれでいいという状況が納得できないみたいです。

本来、教育現場こそ「希望とは何か」を「希望とは何か」をきちんと語れる場所ではないといけないはず。しかし今の教育現場は、抽象的で夢のような希望しか流通しない、本当の意味での厳しい状況なのかもしれません。

山田・・ 子どもに対して安易に「希望の職業は何ですか」と質問すれば、スポーツ選手やタレントなどという答えが返ってくるでしょう。しかし現実社会と、スポーツ選手といった自分の夢をどう折り合わせていくか。それが本来の教育のあり方のような気がします。フリーター問題などに象徴されるように、そこがうまく機能していないのではないのでしょうか。

玄田.. そうですね。だからといって、小学生に「自分がやりたい仕事をちゃんと考えろ」

と言えばそれで終わりかというところ、それでは何の解決にもならない。今後、キャリア教育などを進める上では、希望を持つときつかけにして、「希望」を「SEED（種）」にすることでいつでも人生を軌道修正できるといふ、きちんとした情報を伝えることが大切だと思います。

山田.. どういうプロセスを辿ったのか。まさにその過程が大切ですよ。結果を見て単純に考えるのではなく、希望をもっていたのに希望通りの仕事につけなかった人が、どういうプロセスを辿ったのか。事例などを使って、もう少し深く探っていく必要があります。

玄田.. 山田さんは、「希望」を考えること、またそれを社会科学として研究することは、大切だと思いますか？

山田.. そう思いますね。私は家族社会学者であると同時に、感情社会学という学問分野の研究も始めています。一九七〇年頃、アメリカで「感情を社会科学でできるのか」という動きが起りました。そのなかでは、感情を「自分でコントロールできない、自分のある種の強い欲求状態」と定義しています。

私はもつと簡単に「何かをしたいという欲求」と考えていますが、それは他人から「こういう感情を持って」と言われて持てるものではない。この人を好きになりなさいと言われて、好きになれるわけでもない。多少の意思や環境的要因はあるかもしれませんが、何らかの要素や過去の履歴が積み重なって、ある感情を持つようになる。だから「感情社会学」なんです。希望学にも、それを発展させた形に当てはめられるんじゃないかと思っています。

玄田.. なるほど。希望は一種感情の問題だとはしながらも、一方で希望そのものが見えないときに、それに代わりうる何に着目するか。また、それは私たちに何を与えてくれるのか。それが今後の大きな課題の一つでしょう。それを分析するために積極的に調査や取材を進めていきたいと思っています。

調査を行うとき、一番大切なのは仮説。希望を考えるとときに、どういう仮説やロジックを構築するかが、とても重要になってくるでしょうね。

山田.. 希望を持っている人たちは、どういう人の評価を欲しがっていたのか。欲しいと思ってきたのか。私はその点を特に追究してみたいですね。そのモデルとして、個人的には「オタク」集団に注目しています。

仕事の世界でも家庭の世界でもないけれど、「オタク」の人たちは決して一人ではない。必ず周りに、自分のやっていることを評価してくれる集団がある。その中でお互いを評価しあうことが、未来への希望につながっている。これを一つのモデルにして、会社でも家庭でもない、自分が生きていくある場所に関して分析できないか、又はそういう場所を作るための基礎調査・分析の枠組みができないかと考えています。

玄田：

今回、全所的プロジェクトとして何をやるうかと考えたとき、所内の全研究員にインタビューを試みました。これ自体が画期的なことなのですが、結果として、希望のように曖昧としたものに関して、社会科学的な分析が全く無かつたわけではないということもわかりました。

例えば、「現実」というのも、主観的現実と客観的現実の二つから成り立っています。本人がそう思っているから実現する現実と数値に表される現実。それぞれが今までどう捉えられてきたのか。その分析方法、考え方などを大切にしながら、希望学という新しい学問にチャレンジしていきたい。そして社会学、歴史学、経済学などのいろいろな分野が関わりあい、最終的には学問の世界を超えて、現実的な社会や人となつたりあえる。そういう機会になればいいと思っています。

山田：

私はこの問題は、マックス・ウェーバーに還るかたちになるのかもしれない、とも考えています。「宗教はWAY OF LIFEである」というのが、マックス・ウェーバーの定義。生きやすさというか、宗教や社会の中で、苦難・苦勞に耐える力がいかにして身につけるか、だと私は解釈しています。今はそのWAY OF LIFEの転換期、新しい生活様式への転換期なのかもしれません。その新しい生活と希望という感情がどう関わり、影響しあっているのか。そこが、今後の研究の焦点だと思っています。

玄田：

確かにそうですね。WAY OF LIFEの転換期の中での「希望」が、社会とのつながりの中でどう生まれているのか。今までの歴史的な分析結果を十分に活用し、皆さんのご協力をいただきながら、研究を進めていきたいと思っています。

今日はありがとうございました。

※注1 原題＝Shawshank Redemption/1994年。原作は、ステイブ・キングの「刑務所のリタ・ヘイワース」。